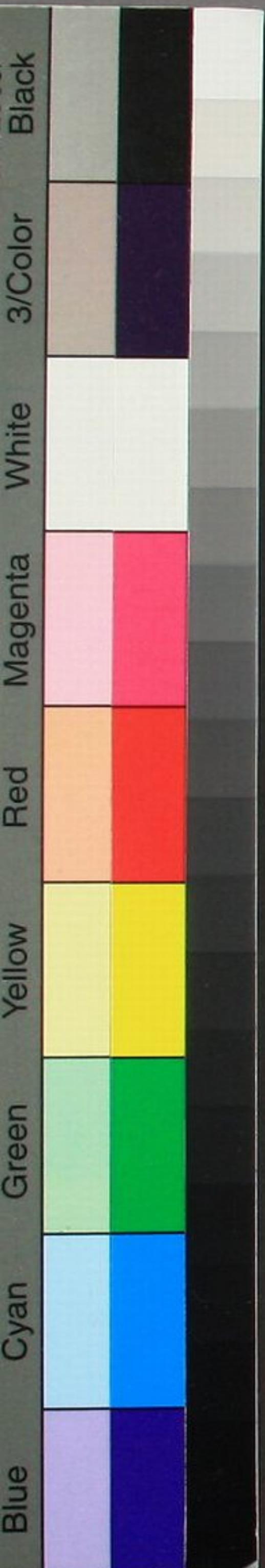


8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

古文真賞  
卷之二  
目次





古今和歌集卷第四

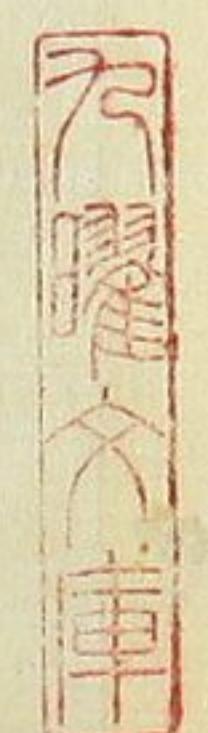
秋平上

物語日より

藤原敏行物語

西村源  
士元男

秋まかとめよかやふかのとみゆのをかそがくうれわ  
秋よくもうちうれわ。あは月よいあまくふみえね  
どもせばかくつ吹く風のとくよハあとくればかくう  
や。一禪沙夜。やう。満也。ゆ。まくらうり。ば集よ  
秋暮とくくとあせて。麻のめふかくみて喜れまけり  
かく。り。び。解よ。やう。あきやう。り。と解  
て。さやう。かく。ふ。かく。と。三。相。と。さ。う。に。と。え。と。り  
ふ。と。さ。う。あ。さ。う。さ。う。大。界。同。下。像。名。と。さ。う。



にとひよ酒。満まどとと用うれ。あまやうよの辭定也  
秋立日うるのとおへつとも桜の葉乃川高よ向せ  
えうーくろとりふアアリテ、もう  
川道もとと。莫長川。大井河。極川せうえうまもと  
りが都もえうも。蓮也。上方をむこととハ。あま高よ上  
あめり川せうえう。あそひうり

## はく桜紀

河をの瀬くをあうすすりひう浪とちりふや秋まくと  
うちじうるととおふやねハあくん川。新めす  
くあわかみ。風ふ浪まみたれを秋のきのうり  
よせてづう

## 歌とらむと

## トミクヘモス

八

寂さう夜のとおとせし。うきうき秋のもう月  
秋乃初風のやう。だといさんと。うがせきしが夜れす  
とあにうくせく。うかく。うかく。うかく。あたり。  
うかく。うかく。妻よ。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
夜乃とそあにくとそりづくと。えあて。我宵子  
我婦子。えあ通角が漏乃。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。  
うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。うく。

卷之三  
兵人へいじん、たまごもよき大将だいしよなり。かく小をされば、  
はやくよきまつりとて、うつゆのまふひをもてて、背せきのゆ  
をよむにあらわむとて、うつゆうつゆが、心こころのまに、縮くわまつて、あくまし。  
風かぜのあくびとひよし、肉食にくしょくのみやうづみうづみとす。  
さすくらひよきさんとが、おののれのふとくそをやくわ  
どくよのねりびとく。まよよほのとく  
じづきとも用もちひとく。うつゆにて、せきよあめきて、たぢ。縮緊  
もろくともりよかあり。せきよくまきてとね、累たまごあり。左右  
にばすと、九石くせき乃守下のしもとに入いとせきめうをひい、うち一石いっせきあ  
ふきりとくろ

皆風乃吹き、日暮りて久のあまの川あよたぬ日暮  
一と経るよ一すひあはれ、  
たゞ  
緑女うちわと、名をあいへもせん。

おもての風吹き。天川原より見ゆ。一  
とあ。あまよ。あまよ。努力乃吹。一  
つとも。たゞ。行とつまも。努力と云。行と或行。ア  
哉。あ國。大船。乃星。まよ。て。やも。差。里。と。ひ。あ  
國。と。あ。じ。二社。入。ち。ふ。河。あり。天河。と。さく。女。を  
せん。と。さく。ぞ。纖。女。の。あ。り。男。と。ま。ん。と。お。り。と  
ひ。も。が。入。ま。よ。こ。う。り。七。月。朔。日。じ。り。ち。り。乃。あ。ま。よ  
あ。ら。ら。中。よ。那。と。続。く。さ。く。あ。上。下。三。よ。水。船  
入。き。く。て。や。あ。上。中。下。に。男。の。舟。と。ま。く。水。船  
を。も。ち。き。う。ば。ま。と。せ。ん。と。そ。天。原。あ。ま。よ。み。日。い  
と。と。う。

卷之三

かくのあまの内<sup>ノ</sup>入りも、ちよつとあまにねうて  
あまは、椎<sup>ち</sup>が肝<sup>心</sup>要<sup>う</sup>の物<sup>もの</sup>あれど、酒<sup>さけ</sup>あるまいだな  
がむとむりうるそとけとよ、あわせ人<sup>ひと</sup>あみちと  
「まくまくいきまく」

天の御代をもとめに、正月をやさうはあらむをもとめ  
有まつて内に坐るととも、小まつてひら。藏女つるのれとゆる  
うきふじあくはばあづま。紫極院佛<sup>もと</sup>より、柳<sup>もと</sup>と  
れくわとちの浦<sup>もと</sup>とゆれあり。但<sup>ま</sup>事方<sup>くわ</sup>集<sup>まつ</sup>  
焉<sup>くわ</sup>よ津<sup>くわ</sup>あよ申<sup>くわ</sup>とりん紅葉<sup>くわ</sup>の橋<sup>くわ</sup>へちゆくも  
是<sup>い</sup>いじ集<sup>まつ</sup>つ。かみよちのくわとあくを、キヨはまとて、柳<sup>くわ</sup>と  
ふとまえすりつづくと、空<sup>くわ</sup>あく。お橋<sup>くわ</sup>を渡<sup>くわ</sup>らす。身<sup>くわ</sup>  
も帶<sup>くわ</sup>も。舟<sup>くわ</sup>もまうん付<sup>くわ</sup>。さりふかが、さくまうせう

天川あめの川かわとよはまよはまとつうす。まのまのが帝みやけん彌塞みやせよそく見み  
水みずと刀とを取とりよほくよほくよ。游あまよもあく。ちかくちかくと  
ア。纏まき女めのよあひくあひくびとびととつじくとつじく。まくまくとあゆうあゆう  
纏まき女めのもくもくよ。石いしととももだらもだら。もくもくててまくまくり。げ  
とと拳こぶしをとくとくた。帝みやけん位いををば。色いろとと不ふまきまきててとくとくれれる  
とと東方とうが朝あむむ。りととくく。纏まき女めの乃のもくもくりり、  
よ。りととくくのままととくくよ。帝みやけん行ゆききととくくせ。游あまよよはまよはま。ばは彌塞みやせ  
わわととくくのままととくくよ。ままままのの移うきき、  
わわととくくたたわわううよ。游あまよよはまよはま。おおととくくくく、  
ままととくくああしし。河かわ五ご方がたももそそりり。おおののああ

寛平の席附する内裏うつよまゆぬとの事  
うちたとくまくねともわおきうるよんようり  
てより

とくのり

河あき漸かに温たらりて、まろりもひぬをもさけり  
うとあひるう程まふあもぬあらへて、ひまをせせ  
あぐりまくらもすむ。並のゆわくとより、清能白  
浪ハ、あまに漸ひるく温をたゞく也。まよ一筆と約  
あて、ちくととめぐらすりもて、其のあまも、い  
うれき。伊勢太輔が、自筆の手は、よこりもさ  
ぞと、ひくとく。檻縁ハ、まくらもくのびとひくねを  
うきだ。まくらもくをもあまひばたに、因キなり。  
藏女が、すき。うきだの橋よりまくら。清能をまくら

じくやまもあもどりくふ風情よゆくまくら  
ゆきよまくら。ゆきにまくらもく。今へゆくまくす

かく、御附三けいのえの秋合ひ

藤原あまくら

まくらまくらもくづくせられもよひくもしもすくらよも  
藏女。とくふ一をじと、言あちまくらほくらもく  
一だじあくらもくづくへまくらとく

まくられ日乃表より

丸河固三の

とくふもくとくもくとくもくわうのねそとくまくら  
わるくとくもくとく藏女ハあへど。一をき教ひそくもく  
ときり

ちうにうほのあわせて、まぶたをくらひやうへり  
鐵女よつてのうかみどりをぐねびゆを  
ごぶもとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
あふとりすきちれど。もやうへじとくわ女の鐵女よ  
あまとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
すれ初学記云女子以五色絹帳金銀糸鞞牛鐵女  
まく毛巧とくわざとくわざとくわざとくわざとく  
よ竹乃革とくわざとくわざとくわざとくわざとく  
じあぐらきとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
うとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
えんとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
ともとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく

年とくわざとくわざとくわざとくわざとく

うせ

うもうとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
鐵女よつてのうかみどりをぐねびゆをくわざとく  
人よあくとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
とくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく

うせ

今とくわざとくわざとくわざとくわざとく  
いとくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく  
とくわざとくわざとくわざとくわざとくわざとく

とくわざとくわざとくわざとくわざとく

和うう乃日とくわざとくわざとくわざとく

事あつてはとくに御みゆき、清く  
はれよし。といはんやどぢくふ。是ハ  
なれど。ゆき乃ひえまとまうへさむ

懸石記

蒙古文

あらうりりりとく月の朝までいのね、まよひ  
あらうりりりとく月の朝までいのね、いは  
かきをもじてきらきらよ。やまつるのれ  
本紫ぐるぐるの月の心を  
ゆねてゆねて、おもてこゝとくまくらすが、月  
をよし入月きり。おもてこゝとくまくらす。月ふくま  
どもまづくかゆふどくま

大今は秋の氣が少し強めで  
記物と書

朝日乃歎のくふちうへづかとくま一さ  
ゆめと風ひあくよ。む月へ十四七十八をもるの年  
とま  
秋すよく秋すもあきふ雪のひまげはせそめ  
よごすあふ東方能すもりあまよしのうきふとま  
あじゆのうきだまき

あらかじめ船を出でさせむちうくの爲めとばかりと云ふ  
まことに、うつむひゆと云ひりともりへがりのことを  
おうかうにせきとひよ。以テ知るが如く云ふ事  
船の事は甚だ多くあ  
ひくらひ乃處は甚だ多くあ  
あくと秋の感とあらすきの風によくあらざり

是貞のみの家の被合のう。仁和二年九月四日置平  
ひははとおもひのと秋のあそびあります。強り、まろ  
りゆくはよしおねど、船のあたごてのあすきあすき  
つるのあともおも秋の感をよしよしせてもあらう  
はとおもひのう。

かむからへほやふへとあすきて秋の被合。

むねうみきりほりよすあわ

内裏裏方舍あわきり。被合の時。壁につけ出で

さわら

### みほ

かむからへと思ふ事をひうじねてあすけんとまをう  
うとうじぞうの物をあすけんとまうねてゆく

人をすまこと候とおひ人のがまね人をう

うとうじよ。いはのあとく。被合のあとくと。例へ  
詞をふねつくりよ

### 影あらむ

うとく人あらむ

かむからへと思ふ事をひうじねてあすけんとまをう  
秋の東の月のくまもとて、うとく人あらむとまをう  
被合のあとくとまをうとせば、うとく人あらむとまをう  
とりあとくとまをうとせば、うとく人あらむとまをう  
朝もととあとくとまをうとせば、うとく人あらむとまをう  
みえじよう。月とくまもととあとくとまをうとせば、うとく  
あとくとまをうとせば、うとくとまをうとせば、うとくとまをう  
世よ山<sup>シテ</sup>荒田集とのふ文ハ孫の一座の書と云ふ

秋の東乃月とつよ野ノトトムト。あらう新に秋の東乃月  
ともるとあよきくそ。えもんハ新ノアキトトム  
ビシテ、おまくスルカニキトトム。上うるハビムアドモ  
竹林モ。古今ヨリもおまくスをまきりあはして思ひ入  
たまや。御脣ハ人のあまうよゆかべと、うるせ  
らふ。朗詠江狂よひ。びう乃作ま乃江。観  
田集よハ伊衡イエイが詠う。び歌佐佐輕ヒツコシが作ハ新。と詠せ  
らふ。基佐ヨシサのれあま、おまくじりと見え  
ゆく。在覺イマヘもち別ハタハタよおまくじり。おうう。野  
菊乃キムモト。一枝イチジクを抜ハサウく。おまくじ  
を取ハサウく。枝ハサウく。耳アマにあふどとせ  
おまくじて。おまくハサウく。おまくハサウく。おまくハサウく。

信和の度乃物也。ありひく。故がりよひあら。半の身  
くちうへども。ひくまをひ。うも。も。も。も。  
魂をひき。信和歌ひ。けい。

自らもまことに成る事と考へがくものなり。往々  
と申す事と申す事はふあるんと申す。月の  
つゝきて、夜のよよと紡たう。夜のよよと  
乃のゆき也。と申す事、おまかせおまかせ

1

あれどちふれとくかられ初めの事よりあ  
月ハ薩摩朝氣も。おきびとばんじゆ  
あらわとくわ

古今類要

九

ちよりのうきくねど。さうかひとつのやうよまわう  
と。神かひとつの秋よあひどくよ。秋本日ふ

一  
人  
長

卷之三

ひきく月の桂を秋もあと紅葉がそれもやさりぬる  
月の桂よ。秋はまだちとうう。新めておりまふとせば  
とは櫻葉もいへや。まことに秋もさうか。九月  
の桂もさうやうからうん。とあら、月の桂へ。まもさく秋  
ゆみうちをとくにたるふ。以言ゆよ。桂花秋向ようこそ  
ハ桂もさくとみえたらと。那般りうそと空に家ひえ。桂花  
を育むを。桂の育むを。あくまで。このほほの力を繁  
よもうじつとまく。秋よハさうもあるねまとも。

もりもありて、まことに多くあり

卷之三

秋の暮の月の夜あづまれいづかの山をあづまつと  
自東あづまきいづかの山をあづまふ朝にさと  
えぞの山をやまとあづま。傳はす  
人のりふさまわらうるをそらのちる  
くらはしてよみが

藤原忠房

えりとくらむはあひへ我を傍ら  
まちと。まづおひくとくさゆふ。竹の聲れど、  
あがれ死ねおひく我をまづかとす。

かく歌をひのむ

秋乃葉のゆきもすすむ雪は我へとわやうるも  
よしとくのやうきくらんやまに葉のあくも  
そよごはるくりとがんぐわくわくうる

歌

あき萩もまつてねむる巻きわねともやうはれ  
よしのこばくじめうぐくて初もあぐらうふまづ  
おのうきうらはうじねとくやううひだすも  
おのれい病もうあくふきうじま村とふまのうま  
病乃こくすよ秋のあまじよあく。まもしりと  
よしのうきうらあれもあれりと。病結成君もと  
りくさり

君をかくすにやうくちうハねりののうる。かりうる  
さくみゆきまがく三きくあひてあくちうくねち乃ゆ  
きうくわくうくわくわく。華字也やがくくらむ  
秋かくすをゆくしねむちをすうかくすもくほ  
よけ言に秋の豊ふみちよどしわねど。ましの  
あうとうかくふりそ宿やうくまくせくうめんと  
すうり

歌乃豊よ人まう宏乃をうせ也我うとあまくつことかん  
あまのよ人まうのこゑ乃もく。誰とまくてハせ  
ねど我うとあまくつことくんとせ  
紅葉ものちりてつむわう我富小僧とおもあらはん  
わざう乃おつまうをうつまう富ふあれとねぢ

さのと聞くじとよ。巨き等とくまく聞くをさの  
とよあらうぢり

日の間つたよ月に言ふとがくはのまをゑく  
ひくのあはづかふ秋の日がどもくれねとせ  
ぞ。よのまふとあつとたゞよ。水とりよ日曜を  
ちゆうじせめり。空家云々山乃は夕陽の程をなす。  
都内假想よ約半千。家やよハとありて山のと去  
ゆり源氏にかどり。きのあとある。日曜と  
日の夕事に多く物なれど入日の新そよす  
す。一きじとく。いとじよとよより  
日の間まとのタぐれを風うかふと人をさ  
さうの秋のゆべ。何とく物語へきび。三

見く雪く風のうかふとよ人をさ  
さうの雪ようれ

左系え方

約人よあくね物くゆうゆうのとくをうめう  
まく人よくねりのとく。もううりの乃物  
あむきくみこ乃家の被合乃く

ともめり

秋風よけづりかひそやかうだもつことくまでまうし  
初霜アキシ。かく西おへだがまくとてのあづきと。う  
あてまくさんとあつてのあづきと。う  
ふよきくわはるの風よ丈と付て。古くよき傳たち  
半のあらぬ佳物よ秋風かくとがりふほをら野と

いふよ。枯風ひやくふあへば。乃へれども。まきり。又  
都思経よ。善友ちよの父。又と存よつまて。けうりに  
波斯國すゑく。たゞ小あつて。扇てゆり。キアリ  
又石書きとひすき。いの花つ。ううがく。えふはれ  
ぞりよと毛づら。かよ。水産移築事。厚済院とひふ

景

卷之三

はよるかのうむきをひそむすよけにやく風よ夜、まよふ  
じまく門をあらざるからざりて、おまほ乃もまづれ在り  
くわぢりあてゆぬ所が。氣の風とまわる、打吹を  
よろよよくうりとせ、ちへはくせじきうちよ、ねえ  
ようかうりとあわせたり。いともかく甚しきに、夜あきれ  
第人春鶯をいめり。宿鳥肩をとつ。秋はるまくのくすみ

田より水引りて山へが在よ。づるも和歌もと  
くちひとりすと。安芸のまやまわ山内やまうちのち風とも。り山  
もとす。あり。船税。あり。まをつまむ。せざりれ  
き。庄たる紀とく。日中紀よ。庄紀とく。とうごと  
人の物をあらわす。ひか乃後く。代の  
人。室をあると。家産。大ふ。物と。大ふ。物と。秀

さへおまへにまかせらるゝ事もあらずたゞくと  
船の國の事も、せきものあつれふ事も紫り  
あはれの事も、いとまかせらるゝ事も船員の事も

あり。何事かあつてゐるかを考へてあらねとの如葉の  
きとつまことうぢあら、ひあぐれどにつまてつまんむ  
るや。毛毛二あら。我意をいふもせむ乃ちく立  
つてあらやもう鶴乃づれど、みちのくも若繁  
うやすくあるを立ねても萬能の羽あもだね  
まわ

ひふかを問ねるうらのまくとも繁がありくよ  
がもやくさむるうるうる、轟かまくもあくもがく  
せぬよと、あそ乃朝うりゆまくまく山か聲よ  
クー飛ひつと万葉よびあくのあむり  
主産うるそつゝてくねくねくねくねうるよ  
はうかまくあち別くつゝ、あめうりほう居よ

と我林寺乃うよはうくよくよ。眼の体とある  
霧のまづきを濁てつあつけげまぢり濁てつわ  
うきみてつゝと、清くもあねどといひ有りてま  
物語よ廻森乃拂因行極がよ乃小言をうと聞くハ  
自ら。拂因戸よりありて、作音の下よまくよ  
るなり。拂因戸よりあり。拂因戸して、うせまれとあり。ふ  
るれあととくよ。ノリ歌聲のあくろりあくふせとつ  
をえきて、佛院入ゐるとおり、佛院入ゐるとおり  
ふれがれあつり。お擇が式よわす小八の歌とたてたり  
モ一よ。殊物者生不義名色役野喜山也可義を  
山とづり。との歌乃体あり

あともうみやめりやうやうよゑの下せまうもうひよち  
じき方へあつ人のいもく持せり人まちうりうりと  
あともうとよびと。ねうりびのちうりうりふれあつて  
きはうれと。ちうりうりと。とくにむかは

窓と車の声附をかひ乃まのむ令のう

葛爾苦根  
方丈草  
名尚男

ま。まくはるかうへて。まし集よ。秋の風ひやひよ  
うへと。まくはるかうめ。まくはるかう。轉ふ  
みまくはるかう。浦よたう。浦よたう。あゆ様よまく  
いわゆりやまく。船船。まくはるかうと。まくは  
り。まくはるかう。

おまえの心と國の心と  
連れてゐるが、あれがのうが  
あらゆる心を、うなぎとやうひの  
心で、おまえ

是實乃吾之所有欲合之

卷之三

もく山は紅葉のあつまつた山で、秋の頃は枯れ葉の  
落葉が山をあらわす。渓山の紅葉はちいさく、秋の頃は  
て、あれやまびらかの紅葉をつむりてかぢり、山とあら  
ば秋の山の紅葉のあつまつた山である。藤丸山  
が紅葉の山である。紅葉の山である。山の紅葉の山  
乃はとある山である。紅葉の山である。

卷之三

其一  
其二  
其三  
其四

秋萩よ、秋列やれどもあれ山下とて、  
きくわざあれや。別里をとて、又おちひやまが  
とて、うきへおまじまとて、又たれおまじまとて、  
麻乃きとて、よそうきとて、おまじまとて、宣  
ふう。源氏よ、まじまとて、ほまふもあら萩の落ふりと  
うき。なりれおまじまとて、よどくあるは、石もえね落葉も  
ちりねとさとて、おまじまとて、あらは、石もえね落葉も  
おまじまとて、あれおまじまとて、裏觸とて、ちくわさくらせ。  
とて、うきとて、おまじまとて、宣す。

おもひとあらはせても度のやうにそよぐてまわるやうに  
葉をわざわざとひらがめふりみえびてゆくのやう

よはゆうとく。ふれあひて。秋の声にゆうじどふ  
じきりきたり。襷をもとめどわあせあつと  
よおきて。さげことひよ。ああきち。自れあつまと  
り。あまよ満とく。まへーとをもじとくもじま  
すらうかみのるやあらき。辞のまくわへまくわへ  
右後拾生。よあるみやまとくひ作。左のふたりと  
ひまきとくあまよかくふまき

あまよかみのあせ詠合のまく

花落とす。梅の船

のこ葉をむかひよりまみれ。左へあらへいきやうらん  
ちだの花をまく。尾上へあらへとくらんとくらんとくらん  
花露。麻呂。花始開。とあり。桔と麻呂。まよとり。

麻呂と花をうつむく。うつむく。あらぬ。まゆの尾上と云  
き。山のうへとづれば。まよとく。まゆの手。席よほを  
ひりあらへつまく。ゆまく。人の秋の聲よくの  
うちとまくつめそに。あら

みほゆ

秋の聲をうつむく。むればかりの心もまれきりくり  
落のあゆるよきく。花の。もとのあくろとよまれね。と  
く。あまうりあらへよし。あづがさあうと。たとて。よ。右  
ねうり。まゆのめぐらむ。花をく。ありまこと。あじ  
とく。あゆるよし。あまうよゆの。もじゑとく。うるを  
撫ふとく。まう常の聲をまく。左の。よもよけ。本  
撫ふとく。あらう。あらう。わく。わく。わく。本

古今抄

卷七

卷之六

後人合編

のまゝ萬の下葉をばくとよりや独あら人のまゝも  
まことにまづはつて付附ふ。あらじもひきひとふ  
人の國とあらせぬとぞ。びりてま難渡とく。ひき  
あら人とのまめたまひ。國とあらせぬとされど。鑑  
字典へ國とあらせぬすふよりたうまく目とあらセ  
わがよ用ひとまふも。まよ。莫<sub>レテ</sub>海<sub>タクシ</sub>露<sub>シ</sub>寡<sub>ク</sub>とづく  
ひきまづる乃の滅や。ちほん物語りは重<sub>シ</sub>のをひ乃とおお  
ゆの望<sub>シ</sub>。富<sub>シ</sub>れんとめの。あらうるの滅や。あく  
てとくさんとくふる乃の。あらうるの滅や。あく  
あきせて。じうぞ今集。秀<sub>ヒサシ</sub>歌十首。櫻<sub>シラメ</sub>てまづせよと

後も羽院より。まよは作おうとは、いふ一  
處の處をかねて、あくまでも、人へねら  
わん人のまへきりや亭のけりあたりと  
其のあまゆめんと、ちかくはあらそひと人  
了

宿をもとまきぞちりぐら

萩をちりくじとおもむきてとゆんざつあひま  
小草の萩がさだのちりくじれどほのくふねきてお  
うんざつくわくあひくことねあと仰。こたうくせがす  
あひまくよみけのる。いはめひま。他門の。萩あや  
くまくわあさだつまく萩とやられ。庭訓もほやま  
そ。只西種とりひできりとおほは絆とぬやくは  
爲めりしとくじとおとあう名別。万葉集十一

ゆあどくあねねくぐくのあまも萩あおねきてうつむか  
え萩の萩あくまくとほのうつむか夕の萩風乍と  
よめりほくすもとあやと紀令と仰まくともあわせ  
あまくろは。千字文よ。處桂の萩とくよんきり。古方

色付葉の萩の萩あきうつむきと拂、枝とくねば  
れ。秋のあと。萩あくまくとほのうつむかもりと  
あとあ種とくうべー

あわせくわみこのあ乃被合ふとある

丈庵和尚

萩のせきとく白萩、あきうつむきと拂、枝とくねば  
れ。秋のあと。萩あくまくとほのうつむかもりと  
ねくわあたうとよ

歌

傷正遍照

名よめくとく白萩、あきうつむきと拂、枝とくねば  
れ。秋のあと。萩あくまくとほのうつむかもりと  
ねくわあたうとよ

まくまくひづれ。序は御さんえたり  
傍の通船うちある。まくらの向よがと山  
のふとてゐる。

あまびりすまち

かねたうとやうせじる男のあくとありと  
おとこいよ。女めあくとあく。うねすとあくと  
つぶせんとうすねど。女よみそてひる

とくゆのね

私ねまふをくひまへ。女めあくとあく。うねすとあく  
女めあくとあく。うねすとあく。うねすとあく。うねすとあく

あくとあく

### 野 緑

まのくわき

女めあくとあく。うねすとあく。うねすとあく。うねすとあく  
女めあくとあく。うねすとあく。うねすとあく。うねすとあく  
うねすとあく

朱雀院の女めあくとあく。うねすとあく。うねすとあく  
朱雀院の女めあくとあく。うねすとあく。うねすとあく

車屋総本店

まくまくひづれ。序は御さんえたり  
秋の葉がよかどものうねすとあくとあく  
うねすとあく

古文書方略に、古文書大店

秋うそとおゆまがれせらむ天の河をひくねをかねへ  
あきの月をよしめのへりおひねりの夜の穀女のもと  
秋うそとおゆまへあうぞとす

はるわき

たる秋よわぬ愁のへやのむらむとくよもてかくはるうつよ  
人の愁よくわな。我愁くくらぶよくはるうつよ。何  
とくよくわな。とくよくうつよとくよ。我と抱ふよ  
てくよくわな。とくよくうつよとくよ。彼愁とく。あれと  
空くよくわな。とくよくうつよとくよ。だがあくよくわな。とくよ  
とくよ

みづ

あらうの塵をほのかにまくまくじ夢の夜とくす

まおひまじゆふせらむとくよくはるうつよ  
あおひまじゆふはるうつよ。みづまくまくうれし  
病つむかうづよ。みづまくまくうれし。病つ  
むかうづよ。みづまくまくうれし。病つ  
むかうづよ。みづまくまくうれし。病つ

みづ

まくまく

いのちをかやくにだせんをれまくまく  
とくよくのへのへのへのへのへのへのへのへ

まくまく

ひとこころもくらひお部屋をれまくまくうしてアキマ  
ひくらなうじゆめうらひお部屋をれまくまくうしてアキマ

ゆくとよ

やくすうりうらへ人のあよまち

卷之五

まことにあらわす。もとからおもてなしの心がなく、  
あくまであくまでおもてなしの心。  
かくあらわす。うそをつくことのない、  
ほんのあくまでおもてなし。  
寛平の中河義人とのおもてなしは、  
とくにまことにあくまでおもてなし。

平國文

もああてにうそじゆうじゆうせよわらうか  
うるふううじゆうううううううううううう  
よねづきのせと。うみとれ。みくら

かくの如きをねどりてまつあまちもとあらぬ  
いじきの久り。かくとねどりかくに  
せざとひくひく。漫書あり。あふ女。やまふゆを死  
たりぬ。が。おもくおもだうもとぬと云てゆく。こ  
中より生あまゆとよ

重きりせし人のことかくねむがことくせんをふらひ  
さむばるのひとくわざくゆふま。重きりせし人  
ことかくせ

あらかくゆとすわ

うせい

れあくねきことくゆれおの葉ふたねとほくあら寝そよ  
まはあくよくなくて。寝ね葉よゆふそ。寝ねとくほ  
くらむくらむくらむくらむくらむくらむくら

平貞文

今うちへうくとだまくとをあやかすれいとひくらう  
秋のくとだりとくらうとくとだれとくらうとくらう。  
ヨクニ程とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

鶴よソジふ秋のよびとくの羽根ちうるぬだす  
あくよ。あくよ。うるを。べぐ。ちうり。あくよ。人へま  
萩と林とよひくられ。おぞなうまとれとれと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

吹風とてねとよ葉ハ飛やハ流れよ葉ふあれと  
えれまみのよみのよみをかづま。もがくとふ音ぶりてあふ  
れ。もがくとふ音ぶりてあふ。もがくとふ音ぶりてあふ  
れ。もがくとふ音ぶりてあふ。もがくとふ音ぶりてあふ

寛平押附にいづるの平合の

左原様

秋のよたよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくよ。あくよ。うるを。べぐ。ちうり。あくよ。人へま

古今圖書

神とみゆく。かと見て、と見る。と見る。と見る。  
の事は似たが、ほんよおぞれの物たり。み  
らとおもひて、うそをきのうしりふ。とぞれを心  
うちたる羽翼をまぶす。歌一首乃うらよ。神と  
ハムシキ。記と。物問あり。」小説ある。わく。  
うきよやさしく。うきよや。南風よ。北風と。やまとが  
てやまに。木實か。うきよと。物よ。葉せひ。氣物機よ  
種経。うきよ。木實か。うきよと。物よ。葉せひ。氣物機よ  
種経。うきよ。木實か。うきよと。物よ。葉せひ。氣物機よ

卷之三

夕かあめの座すとまで、一こ間<sup>ま</sup>ゆよあくべきとりが  
経物<sup>きわざ</sup>をわき席<sup>いそ</sup>よ。縫<sup>ぬい</sup>、抽<sup>ひ</sup>、立<sup>たつ</sup>、  
か年<sup>うど</sup>、左<sup>さ</sup>云<sup>い</sup>常<sup>じょう</sup>裏<sup>うら</sup>。とくまりもひ姿<sup>すが</sup>ちゆきやうふうく  
もひえきりえくもひえきりえくも。坐<sup>すわ</sup>りて、起<sup>あ</sup>きて、子<sup>こ</sup>  
もひえきりえくもひえきりえくも。坐<sup>すわ</sup>りて、起<sup>あ</sup>きて、唐<sup>とう</sup>松<sup>まつ</sup>  
もひえきりえくもひえきりえくも。坐<sup>すわ</sup>りて、起<sup>あ</sup>きて、唐<sup>とう</sup>松<sup>まつ</sup>  
もひえきりえくもひえきりえくも。坐<sup>すわ</sup>りて、起<sup>あ</sup>きて、唐<sup>とう</sup>松<sup>まつ</sup>  
もひえきりえくもひえきりえくも。坐<sup>すわ</sup>りて、起<sup>あ</sup>きて、唐<sup>とう</sup>松<sup>まつ</sup>

卷之三

後人不知

そぞらあひの草とそよぎ、かづねをまくのむすび  
春はるめりやうひの草とみえうづぐ。かづねのむすび  
まくべ。ろくのむすびわくじ。六百番歌合。室家

まきくさくとあがまゆくは、ものひづニまつたまのよすき  
影あおぎよげを秋とちかうて、後成にあよりてり  
わざわざをうむくと、秋の野ふねひあがほん人まきもそ  
あとのよさむ想と、あとのよまねむひあがまさんた  
べどくめそとひをひくと、うよほよて、あ  
あらじとひむのひくと、細くこそも墓儀す  
びやくかの井のほくしもとやものや風をもくと  
百萬千種といふうへり、さきてて、ねと縁をくわに  
用事に衣、さくいじねあよわまとの後、うりうひゆ  
あくよまやくまのうりくまねどおもよわきての後  
さやぐとうほうひねく、用事に衣いすりて、うるご  
うち。用事ハ森を踏ひまよ鶴狩まともく、

うけ入るよひう花こうじうひあを祀を祀  
仁和のみとみふかくすくうけふくれ御神  
従さんとくおも一時、あはるよ遍服、母のあ  
よ座そり経きくすよ恵と私のよまつくりてが、  
むきのくらひはりてよまくたてまくのう

### 信正遍服

里あるて人きぬりて、富るれや度も難い秋のよまうな  
そくへりもてて、人ありて、富るてあり、度も難  
い秋のよまとだらたらと、野くハ野うりて、  
の野まともあすく、ハお富、難字、ませとくじ

